

優秀賞



人を「想う」ちから

岩手県一関市立一関中学校

一年 及川陽実

私には、生まれつきの心臓病があります。生まれてすぐに、一度目の手術、そして二歳の時に二度目の手術をし、人工血管を入れました。どちらも、胸を切り開く、大きな手術でした。私は、そのころのことを覚えていませんし、痛くてつらかったという記憶もありません。「あなたはずっと青白い顔でね、誰よりも具合が悪そうなのに、誰よりも遊ぶのが大好きで元気な患者だったんだよ。」と母から聞いたぐらいでした。しかし私は、小さいころから、人の倍もやんちゃにかけ回りをよく転んでけがをするという、活発な女の子でした。幼稚園でも毎日みんなと仲良く遊んでいました。小学生になっても、元気で明るい性格で、病気の関係でできないことがあっても、それなりに、自分で他にやりたいことや楽しい事をしてみんなと遊んでいました。そんな私の楽しい毎日が変わる出来事がありました。それは、小学五年生の夏、私が突然倒れた事から始まりました。五年生の一学期、もうすぐ夏休みだという時期のある日、家に帰り、いつもの宿題を終えると、寒気がしました。「最近やる事が多かったから、疲れが出たのだろう。」と、その日は早く寝ました。しかし次の日から、私の記憶はとぎれとぎれでした。今

になっても、その日いつ・どこで・何をしたかは、はっきりとは思い出せません。気がついた時には私は集中治療室にいました。ベッドに寝かされ、隣には、初めてお会いする看護師さんがいました。後から聞くと、その病室には、夜間は保護者が入れないという決まりがあり、寂しくて寝つけなかった私を心配した看護師さんがずっとついていてくれたのだといえます。その時の私は、何で私は入院しているのだろうと、不安で仕方がありませんでした。その後、普通の病棟に移って一カ月ほどが経ち、退院することができました。しかし、前のように、走って遊ぶこともできず、さらに何度も入院をくり返しました。そんな時でも友達達は、室内でできる遊びをいろいろと考え、私と遊んでくれました。遅れていた勉強も、やさしく教えてくれました。しかし、私の主治医の先生は、「はるちゃん、入院をずっとくり返してもつらいから、手術をして、治そう。」とおっしゃいました。

「三度目の手術」それを聞いた日、私は恐怖で泣いてしまいました。過去二回の手術は、赤ちゃんの時だったので、自分は痛くもつらくもなかったけれど、今回は事の重大さも分かりますし、痛みも感じるのだと思ったら、急に怖くなりました。しかし、このつらい日々と、手術をすることによってさよならすることができるのであれば、と、私は決意しました。そして手術の三日前、当時の私のクラス、五年A組のみんなから手紙が届きました。その手紙一通一通のすべてが、私のちからになりました。そのおかげで、手術も、リハビリも、耐えることができました。もちろん、傷口の痛みはありましたし、つらく、寂しい気持ちにおそわれ、毎日、泣きました。しかし、「頑張つてね」「応えんしているよ」と優しさにあふれる言葉で、私に生きるちからと勇気をあ

たえてくれた友達。一緒に入院に付きそつてくれて、そばで私を支えてくれた母。家事をして、生活を支えていてくれた父。自分よりいつも私のことを考えていてくれた姉。私の気持ちを第一に考え、寄りそつてくださった主治医の先生や手術担当の先生、看護師さん。そして、見知らぬ私のために、自ら血を分けて、献血してくださった人々。たくさんの方がいたおかげで、そして、励ましの言葉をくださったおかげで、今、私は生きています。

私はこれからの人生で少しずつ、周りの人に「想いやり」という恩返しをしたいこうと思います。私のことを思ってくれる人がたくさんいたから、私は今、生きています。だから今度は私が、みんなを想いやつていきたいと思っています。それで、人の命を救う…そんなことはできないかもしれませんが。ただ、その人が困っていたら、少しでも寄りそい、「ちから」になりたいのです。

「想いやり」は目に見えません。しかし、私の胸に耳を近づけてみてください。「カチツカチツ」という音が聞こえます。それは、手術で取りつけた、金属製の機械弁の音なのです。もし、この音を、「機械みたいな音だね。」と言う人がいたら、私はこう言います。「違うよ。これは、私の生きるちからになった、『想いやりの音』なんだよ。」と。